

Title	J.S. ミルの社会主義論とマルクス
Sub Title	Mill on socialism and Marx
Author	安井, 俊一 (Yasui, Shun'ichi)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2019
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.112, No.1 (2019. 4) ,p.3- 14
JaLC DOI	10.14991/001.20190401-0003
Abstract	ミルとマルクスは、ともに人間の自由の実現を目指したが社会改革の構想は際立つ対照を示している。だがミルの思想からみたマルクス主義の欠陥は政治的には利用されたが理論的には注目されなかった。二人が活躍した19 世紀中葉から150 年余りを経過した今、その後の歴史的経験をふまえて、ミルとマルクスの社会思想を対比してその課題の原点に立ち返り、問題を見直すことは、混沌として不安定な現代社会の見方を整理し、今後の社会の在り方にヒントを与えてくれるものと思われる。 J. S. Mill and Karl Marx common object of social reform to realize human freedom. However, their ideas of reform reveal a remarkable contrast. Mill's possible criticism of Marx's socialism has often used for ideological purposes, but its significance has not been fully appreciated on theoretical grounds. Now that a century and a half has passed from Mill and Marx's time, we have acquired some knowledge of historical experiences about property and economic system. This vantage point enable us to reconsider their views on socialism, which grants us some clues contemporary social reform.
Notes	特集：マルクス：過去と現在
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20190401-0003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

J. S. ミルの社会主義論とマルクス

安井俊一*

Mill on Socialism and Marx

Shunichi Yasui

Abstract: J. S. Mill and Karl Marx common object of social reform to realize human freedom. However, their ideas of reform reveal a remarkable contrast. Mill's possible criticism of Marx's socialism has often used for ideological purposes, but its significance has not been fully appreciated on theoretical grounds. Now that a century and a half has passed from Mill and Marx's time, we have acquired some knowledge of historical experiences about property and economic system. This vantage point enable us to reconsider their views on socialism, which grants us some clues contemporary social reform.

Key words: Mill on socialism, Marxism, distributive justice, human liberty and spontaneity, property and economic system

JEL Classifications: B12, B14, P00

* s-yasui@cts.ne.jp

1. はじめに

ミルとマルクスはロンドンを舞台に、人間の自由を目指して所有と制度の問題に取り組んだ。二人は資本主義の成長期に資本主義の本質と矛盾を見抜いて、矛盾の解決を図った。しかしながら、ミルとマルクスの思想と改革の構想は際立つ対照を示している。マルクスはミルを社会改革の敵とみなして、穏健で折衷的なミルの思想を批判し続けた。これに対しミルはマルクスを意識しなかったが、国際労働者協会（第一インターナショナル）におけるマルクス派をバクーニンやブルードンとともに過激な思想家たちとして一括りに「革命的社会主義者」のグループに入れて、ミルが検討する社会主義論の対象外としている。このように対立する二人ではあるが、ミルとマルクスの体制に対する認識と彼らの提起した問題は今なお重要であると思われるので、マルクス生誕 200 年を機に、ミルの社会主義論からみて、対峙する二人の残した問題について、再考することにした。

2. ミルとマルクスを比較することの意義について

歴史的にみると、ミル（John Stuart Mill, 1806-73）に比べてマルクス（Karl Marx, 1818-83）の思想の後世に与えた影響は著しく大きかった。唯物史観を導きの糸とし経済学を社会分析の武器として第一インターナショナルの理論的指導を行ったマルクスは、資本主義の崩壊と共産主義への歴史的移行を予見して、政治と社会科学の分野をはじめとして大きな影響をおよぼした。しかしながら、マルクス以後の歴史社会はマルクス主義による改革の筋書き通りに推移しているわけではない。先進工業国の多くはむしろミルのいう多様性に富む自由主義への傾向を強めている。

ミルは市場競争と私有財産制度を基礎とする社会と理想的な共産主義社会を両極に置いて、その中間的な制度を含めて、いかなる体制が人類に幸福をもたらすのかを問題とした。ミルは制度の問題を人びとが置かれた時代と国と環境にふさわしい体制を選択する問題であるとし、体制選択の鍵を人間の自由と自発性を最大限に発揮することができる制度であるかどうかとした。ミルはよい体制を選択するためには、人民の知的道徳的な水準が向上するように教育することが重要であると考えた。そしてミルの場合、体制の選択はイデオロギーではなく実験や経験による科学的な判断によるものでないといけな。ミルはロシア革命が起きる半世紀前に、共産主義において人間の自由が失われることを懸念するとともに、過激な体制変革によって人びとの知的道徳的な水準に見合わない制度が生まれた場合、その体制はいずれ瓦解するであろうと述べた。ミルは革命的に共産主義体制へ移行する国がありうることを予想し、その行方と資本主義の永続性を予見していたように思われる。

このようなミルの思想を当時のマルクス主義者は目の敵にした。共産主義革命を目指す第一インターナショナルの運動家たちにとって、イギリスの労働組合の幹部に影響力のあるミルの思想は、

障害以外の何ものでもなかった。シュンペーターは、このようなミルとマルクスの思想を対比することの重要性を認めて、ミルとマルクスをめぐる当時の事情を次のように述べる。

マルクス主義者のミル批判は、ミルの世界観を理解する上で極めて重要である。なぜなら大衆の窮乏が不可避免的に増大するという思想と、革命こそこの思想の本質であるという社会主義者にとって、優柔不断なミルの思想は受け入れ難く、マルクス主義との際立つ対照を示すからである。マルクス主義者にとってミルのブルジョワジー思想は階級思想にほかならず、ミルが社会主義の究極の目標に同情しながら革命を退け、誠実に真理を展開するミルの思想は、単刀直入に社会主義を非難する思想よりはるかに口当たりの悪い排除すべき敵に思われたのである（Schumpeter 1954, pp. 532, 533/(中)290 頁）。

この「誠実に真理を展開するミルの思想」には多様性とともに関心性がある。ミルの思想は我が国では早くから、中村敬字、西周、福澤諭吉らによって注目された。福澤は、ミルの政治・経済・社会・女性論などに幅広く関心を寄せた。西洋文明から日本に不足するものを学ぼうという福澤にとって、資本主義の真実とその功罪を問い、その将来を見据えるミルは、採りあげるべき思想家として彼の関心と呼んだのであろう。ミルが『経済学原理』第4編第6章で述べた定常状態論は自然環境保護の先駆的理論として評価され、また「文明論」（1836）における中間層の活力の富への集中と商業主義による道徳の腐敗、『自由論』第3・4章における人間の個性と自発性の尊重、民主主義における多数の専制、民衆の画一化の問題は大衆社会論の先がけとみられる。そして遺稿「社会主義論」（1879）第4章の共産制における専制あるいは中央集権化批判や『自由論』第5章における国家権力拡大による官僚制に対する批判は極めて現代的な体制の問題と重なるのである。

我々はミルとマルクスの時代から一世紀半を経過し、ロシア革命（1917）とソヴィエト体制の崩壊（1991）という二つの体制移行、およびその後の新自由主義による可能な限りの規制緩和のもたらす帰結という歴史的推移を経験した。ミルが重視した社会的実験の一部を我々が経験したことになる。我々がこのような歴史的経験をふまえてミルとマルクスの思想を問い直すことは、混沌として不安定な現代社会の見方を整理し、今後の社会の在り方にヒントを与えてくれるものとみられるのである。

3. ミルの社会主義論

父ジェイムズ・ミル（James Mill, 1773–1836）から英才教育を受けたミルは、青年時代から功利主義と自由主義による社会改革の意志を有していた。ミルは18歳のとき、哲学的急進派の代表としてオウエン主義者の代表ウィリアム・トンブソン（William Thompson, 1775–1833）とロンドンの公開

討論会で、「競争（資本主義）と協同（共産主義）」について議論を闘わせ、社会主義に関する刺激をうけた。それはミルにとって初めての社会主義者との出会いであったが、このときにミルが萌芽的に述べた「①協同の制度は過剰管理の恐れがある、②社会制度は人間に最大の行動の自由を許す制度でないといけない、③協同の制度における完全な平等は、実質的な平等をもたらさない、④社会改革は教育を重視して人間性の向上を目指すものでないといけない、⑤社会制度の問題は異なる制度を比較してその長短を考慮しながら判断すべきである」という思想は、後の社会主義論の議論の骨子となって展開されていくのである。

ミルの社会主義論は、主に『経済学原理』（1848）を改訂した第3版（1852）「所有論」（第2編第1章）と「労働階級の将来の見通し」（第4編第7章、以下「将来の見通し」の章という）と遺稿「社会主義論」（1879、以下「遺稿」という）の三つの論文が問題とされる。研究者の見解が分かれるのは、第3版の改訂をめぐってミルの社会主義論の真意は何かという問題である。

ミルと彼の共同研究者である妻ハリエット（Harriet Taylor Mill, 1807-58）は1848年フランス二月革命に大きな刺激をうける。ミルは『自伝』（1873）で第3版改訂の理由を、二月革命という歴史的事件を転機として、ヨーロッパ全体に社会的変化がみられるので、アソシエーションを第一歩とする社会改革の傾向を、より明確に指摘しようとしてとめたと述べている。ミルがいう二月革命後の歴史的变化とは、私有財産制が必ずしも自明の体制ではなく、経済体制という問題を社会改革の課題とすることが認識されはじめ、改革のための運動が各国でみられるようになったことである。ミルはこの歴史的变化を意識して改訂した『経済学原理』第3版の序文で、人間を幸福にして人間性を高める制度を、修正された私有制と生産手段の共有と分配を管理する制度のいずれがよいのかを問い、よい制度に適するよう人びとを教育することが社会改革の課題であると述べている。そしていずれの制度が適切であるのかは未決であり、その時代の人びとが選択する問題であるという。この思想は「所有論」と「遺稿」における社会主義論でのミルの主張を端的に示すものである。第3版の序文で述べられた課題の理論的展開が「所有論」と「将来の見通し」の二つの章、および「遺稿」においてなされる。

「所有論」はミルの経済学では静態論の分野に属し、所有とさまざまな制度の比較、および異なった制度における人間性の変化と法則性を探る比較体制論である。ミルはまず「人間の進歩の究極の結果としてみなされている」共産主義と現体制である私有制との比較を行う。問題なのは共産主義における人間の勤労意欲である。ミルによれば、私有制における労働者は怠惰であるとはいえ、自分や家族を守ろうという私利の動機がより強く働くので基本的に勤労意欲は守られている。しかし共産主義においてはこの動機は私有制に比べて働かない。ミルは初版と第2版では勤労意欲については私有制の方が共産主義より有利であるという。しかし第3版では労働者教育によって公共心が私利の動機をこえられるかどうかは未知であるという慎重な表現に変わっている。

次に分配の完全な平等の問題である。ミルは分配の形式的な平等は分配的正義を実質的に果たせ

ないと考える。分配的正義をアート（目的）に掲げる共産主義が実質的な平等を目指すなら、個人の適性を考慮して、異種労働を人為的に評価して公平に配分するという困難な問題を解決しなければならない。ミルは初版と第2版では、私有制においては自由な競争によって決まる労働配分の自動調節作用の働きにより分業の利点が効果的に生かされるのに対し、共産制では異種労働間の差異を測る尺度がなく、単純労働に還元できないから労働量の質的差異を考慮した労働配分が難しい。それゆえに共産主義よりも私有制の方が有利であるとした。しかしミルは第3版では、この困難を人間が解決するかもしれないという希望を捨てるべきでなく、現在、解決の方法を見出せないからといって、共産主義が理想の制度でないことを立証したわけではないと述べる。それは私有制の改善から共産主義の理想の追求までさまざまな体制を検討の対象として科学的な探究をはかるミルの社会主義論の特徴を示している。そしてミルがもっとも重視したのは、人間の自由の問題である。ミルは人間の自由の問題では、人間の自由と個性の多様な発展が社会の進歩の源泉になるという『自由論』で展開される自由主義の思想で一貫している。青年時代のオウエン主義批判で既に述べられた自由の問題を、ミルは初版では次のように述べる。

社会制度の理想は、他人に害を与えないという条件で、すべての人に、完全な独立と行動の自由を保証することである。だが、この計画（共産主義）は、この自由を完全に排除し、社会成員の行動を命令下に置くことがありうると懸念される。共産制のもとで貧しい人びとの生活水準が上がり、生活必需品が常に保証されたとしても、それは人間の幸福の要素であっても幸福の源泉ではない。もし共産制のもとで、人びとが規則に従い強制的に仕事を命令されるようなことがあれば、人びとは精神的道徳的進歩の主要な動因を失い、人間性の多様な発展が失われることになろう。

初版におけるミルの共産主義批判に対して、ハリエットは社会主義の立場から反対してミルに第2版でこの文章を削除するよう要求した。彼女が共産主義批判に反対するのは、彼女は二月革命以降、共産主義による彼女独自の社会改革の思想を有していたからである。ミルはハリエットに配慮して共産主義批判の調子を落としたが、人間の自由に関するミルの主張は変わらない。ミルは次のようにいう。

もし共産主義が成功して生活手段の心配がなくなるという目的が達成されたとしても、生活手段の不安の解消は私有制でも可能である。もしそれが私有制で可能なら、私有制は個人の自由と両立できるという幅広い利点を持つであろう。

ミルは第3版では、初版と第2版での共産主義批判の表現を書き改めて、「遺稿」でも述べられる

「所有論」の結論を次のように述べる。「所有論」の結論は第3版の序文および「遺稿」と同じ趣旨ではあるが、共産主義と資本主義とを比較する場合には両体制を最善の状態と比較すべきであるということ、それとともに、体制選択の鍵は人間の自由と自発性を最大に発揮する制度かどうかにあるというように人間の自由を強調していることの二点が特徴的である。

社会哲学の問題として「所有論」を考察するとき、分配的正義を目指す経済体制の中でいかなる制度がすぐれているかという問題は、最善の状態でどのような成績をあげるかを比較して判断すべきである。この体制比較のためには、人びとの知的道徳的水準を高める教育の普及と人口の適度な制限を条件とする。しかしこの比較のための正しい試験がなされたことがなく、関連する知識や経験が不足する現在の段階では、どの制度がすぐれているかを判断することができないのでその判定は未解決である。もし、その最終的な判定の決め手となる鍵をあえて推測するとすれば、何が「人間の自由と自発性の最大量 (the greatest amount of human liberty and spontaneity)」を許すかという規準がそれである。自由を捨てて平等を要求する社会組織は、人間性のもっとも高尚な特性の一つを奪うものである。

他方「将来の見通し」の章は、ミルの思想の中にハリエットの主張が混在しているために、「所有論」の結論とは異なることになった。「将来の見通し」の章は人間および社会の進歩性を明らかにする動態論である。そこでは利潤率の傾向的の低落論と定常状態論に続いて私有制からパートナーシップ（共同出資）を経て労働者アソシエーション（生産協同組織）が支配的となる経済体制へと進化する体制移行が予測される。ミルはフランスにおける労働者アソシエーションの成功例を賞賛し、「所有論」や「遺稿」にはない私有制から労働者アソシエーションへの漸進的な体制移行を述べる。「所有論」で選択の問題とされた体制の問題は、「将来の見通し」の章では必然的な歴史的推移に変化する。この体制移行の予測は、ミルの社会主義論における一貫した主張と矛盾する。体制の判定を未決としてよりよき制度を実証的に追求しようというミルの主張と異なり、ハリエットは決定論的な体制移行を予測した。彼女は1840年代後半にフランスのアソシエーションの動向を分析し、この研究をもとに労働者アソシエーションを目指す社会改革を図ったのである。

ミルの社会主義論の最終的な思想は「遺稿」(1879)において示された。ミルは「遺稿」で私有制の永続性と所有の観念と所有制度の可変性という矛盾が両立する議論をもって社会主義論の結論を次のように述べる。

資本主義と共産主義のうち、「問題はどちらが人間の幸福をもっともよく導きだすか」を指導原理として、中央集権的でなく、民主的で、労働を魅力的にするとともに、分配的正義を図る制度を実験によって探り漸進的に改革していくことである。そして人間は思考と実践の双方にお

いてさまざまな方向に自発的に発展する自由を持つべきである。共産制において、個人が公権力の支配のもとで、多数者による個性への圧迫が強くなる可能性がある一方で、将来、共産制が人類にもっとも適した社会制度になる可能性があることも否定できない。このように考えると、所有制度の問題は、結局、有利な事情における共産主義的原理の試練と、現在の私有制の次第に実現されるであろう改善とのいずれが人類の最大幸福を目指すのに適した制度なのか、新しい光がたえずあてられる未解決の問題であり、また長くそうであろうと私には思われる。

以上のようなミルの資本と労働を公平にみようという社会主義論の結論の根拠は私有制の永続性と所有の観念の可変性である。ミルは私的所有と競争の制度は、人間性を高める教育に時間を要することとともに、人間が生存と安全を保証する唯一のよりどころとなる生活と財産を失うまいとする明白な理由から長期間にわたって存続するという。たとえ、どこかの国で大衆運動が革命政府の指導者に社会主義者を選出し共産主義が実現したとしても、その制度はいずれ修正を余儀なくされるであろう。しかしながら、所有の観念と所有制度は歴史的に可変であるから、将来人類が修正された資本主義と理想的な共産主義の最善の状態で両体制を比較し、共産主義が選択される日がくるかもしれない。それまでは共産主義の究極の可能性を含めて、社会主義者の現体制批判に耳を傾け、分配的正義を目指す社会改革を続けるべきであるという。

ミルの社会主義論は研究者の流れを二分する。異なる解釈の代表はシュンペーターとロビンズである。シュンペーターは、ミルがハリエットの要求に応じて、体制変革の思想を述べた「将来の見通し」の章にミルの真意があるとして、「革命による社会の転換を拒否するミルの社会主義は、進化論的社会主義」であり、ミルは「究極の目標としての共産主義を明示的に承認」したという。これに対し、ロビンズは「遺稿」をミルの社会主義論の最終的な立場とみて、「将来の見通し」の章を重視する解釈を諫める。ミルの真意は、私有制の改善と社会主義への可能性を等置しており、あらゆる体制に対して偏見のない考えを求め、体制の問題を未解決にしているという。シュンペーターとロビンズの解釈はミル研究者の解釈を二分し今なお決着がついていない。筆者はミルの方法論を含む思想の全体像からみると、シュンペーターの解釈はミルの思想の部分的な解釈に止まっていると判断し、それを著書にまとめた。それではマルクスのミル解釈は一体どちらに近いのだろうか？ マルクスのミル批判とこれに対するミルの思想からの反論をみることにしよう。

4. マルクスのミル批判とミルの思想からみた反論

ミルの思想は政治的に利用され、20世紀初頭には修正資本主義の理論として、また20世紀中葉には共産主義に対する自由主義の祖として採りあげられた。この背景にはマルクスのミル解釈がある。マルクスはシュンペーターと異なり、ミルの著作の中に共産主義の理想の追求や労働者アソシ

エーションへの体制変革の叙述があっても、それはミル本来の思想とは認めず、「将来の見通し」の章を完全に無視する。第一インターナショナルの理論的指導をしていたマルクスにとって、イギリスの労働組合の幹部に強い影響力のあったミルの言動は重要な関心事であった。優柔不断なミルの思想は共産主義を目指す社会改革にはほど遠く、マルクスの指導する革命運動の障害として批判の対象となったのである。マルクスはミルの思想を批判するにあたってある策をめぐらした。ミルはイギリスでは名声が高く、外国人であるマルクスがミルを批判したところでイギリス人の反感を買い、批判が逆効果になることを恐れたのである。マルクスは、『資本論』では随所でミルを批判しているが、批判は部分的なものに止まり、体系的な批判ではない。マルクスは正面からミルを批判せずに、第一インターナショナルの同志であるイギリス人労働者エッカリウスに論文を書かせて次のようにミルを批判した。

ミルの社会科学の方法は魂の抜けた折衷主義であり、調和されえないものを調和しようとして、ないものねだりをしている。ミルの方法では、資本主義社会の資本と労働という基本矛盾を捉えて、剰余価値の秘密に迫ることができない。そしてミルは、資本主義経済の生産関係を正しく把握し、分配の不平等を認識しておりながら、市場競争と私有制を自明の前提とするブルジョワ経済学の立場にたつとともに、唯物史観に基づく歴史観が欠如しているから、プロレタリアによる体制変革という歴史的使命を理解することができない。ミルは資本主義的生産関係を固定化して、人間の意志による分配関係の可変性だけで資本主義社会の矛盾の解決を図ろうとしている。

以上のようなマルクスのミル批判は、シュンペーターのいう通りミルの思想の核心について両者の思想の異質性を浮き彫りにしている。

マルクスの批判に対して、ミルの思想から経済学、方法論、歴史観の三点に絞って反論を試みることにしたい。

まず、マルクスがいうように、ミルの経済学がブルジョワの代弁者の立場から、私有制を前提に分配論の領域だけで資本主義の矛盾を解決できるとしていたのであろうか？ ミルは「所有論」で、人びとの知的道徳的水準が向上し、体制に関する知識が豊富となり両体制が最善の状態と比較できるようになるまでは、経済学が経済体制の問題を扱うのは公平ではないと判断した。それゆえ、この問題を扱えるまでの暫定期間の経済学の研究対象は、競争と私有制における経済現象に限られるという。つまり、ミルの『経済学原理』は、土地と資本の私有制を前提としているが、それは暫定期間の間にすぎないのである。ミルの経済学がブルジョワの立場にたっているというマルクスの指摘は、プロレタリア階級のみが体制変革の歴史的使命を果たすことができるというマルクス主義の立場からの指摘であるとしても、体制の問題の基本から検討しようというミルの社会哲学からみる

と、マルクスの批判は暫定期間の経済学に対する批判である。ミルの経済学を含む社会科学はより広い領域を射程にしているのである。

次に方法論の問題である。マルクスはミルが折衷主義によって資本と労働という「調和しうべからざるものを調和しようとする試み」をしていると批判する。マルクスはミルの方法論を魂の抜けた折衷主義 (Eclecticism) として批判し、ブルジョワ社会の解剖を目的とする経済学の方法は、弁証法的唯物論による方法でなければならないという。マルクスの弁証法は存在の弁証法であり批判的で革命的である。それはヘーゲルの観念的な弁証法の中から合理的な中核を取り出して、唯物論的な立場から矛盾・対立を契機として、自然、社会を含む一切の存在を運動、発展の流れとして捉え、特定の歴史的形態が止揚されてより高い次元の形態に移行すると考える。それゆえ、マルクスの批判的・革命的な弁証法の立場からは資本主義における資本と労働という基本矛盾の調和はありえず、その解消は資本主義という特定の歴史的形態を脱ぎ捨てることによってのみ可能なのである。

マルクスの「存在の弁証法」に対して、ミルの弁証法は「思考の弁証法」である。そしてマルクスの批判的で革命的な弁証法に対して、ミルの弁証法は革命的な方法を排除する弁証法であり、「半面の真理 (the half truths)」の認識と総合を重視する弁証法である。ミルは半面の真理を総合する方法を「精神の訓練 (Bildung)」と呼び、この方法によって人間の精神と社会の進歩が促されるという。ミルの方法はベンサムの個人主義的方法論を批判的に継承して、半面の真理を総合する方法により、個性豊かな人間性と社会の調和を図ることができるかどうかを探る思考の論理である。経験主義の立場から経験によって裏付けされるべき思考の論理は、事象に存在しうる真理の多面性を認め、その多面性の一部のみを認識したことから起こる対立の和解を図るために、対立する半面の真理のすべてを総合して全体的な正しい真理に到達するような共通の地盤を見出す方法である。このようなミルの方法によれば、マルクスのように経験に先立って、資本と労働の対立する矛盾が止揚されて、次元の異なるまったく新しい体制へと変革されるという予測は、ありうることはあるが、未だ実証されない可能性の一つであり、このような一つの予測に固執するのは、社会現象の一面をみているに過ぎない。ミルによれば、体制の選択のために必要なことは、複数の体制の科学的な検討であり、資本と労働の矛盾を直ちに止揚することを目指すのではなく、矛盾を解決する共通の地盤を模索する穏健で漸進的な解決があるかどうかを探ることである。

最後にマルクスは、ミルの経済学が資本主義生産様式の歴史性を看過した誤りを犯しているのは、唯物史観のような動的な歴史観が欠如していることの帰結であるとしてミルを批判した。マルクスは人間が生きる生活諸過程は、人間の意志から独立した物質的生産力の発展段階に対応する生産関係を土台とする物質的生産様式によって制約されると考える。社会の物質的生産力はその発展がある段階に達すると、既存の生産関係や所有関係と矛盾するようになり、この矛盾は歴史社会の革命的な変遷の原動力となる。マルクスによれば、近代ブルジョワ社会の解剖は唯物史観を導きの糸とする経済学の研究によってなされなければならないのであって、上部構造から歴史社会を説明して

はならないのである。

ミルは動的な歴史観に強い関心を抱いていたが、ミルの歴史観はマルクスのように決定論的な歴史観ではない。ミルは1830年ごろ、人類の歴史が自然の順序に従って漸進的に発展するというコントやサン・シモン派の動的な進化論の歴史観に感銘をうけ、これを評価しながら彼らの歴史観には人間や歴史社会の多様性をみる視点が欠如していると批判した。ミルはコントやマルクスのように歴史が一つの発展法則によって推移するのではなく、人間の能力や社会の発展は多様な法則によって支配されながら推移すると考える。そして人間の精神の進歩の段階に応じてさまざまな制度がありうるというミルは、マルクスのように、物質的生産力と生産関係を基礎とする経済的下部構造が歴史的発展の動力となるとは考えない。ミルの場合、歴史的進歩を多数で多様で複雑に構成されている人間と環境の間の作用と反作用との長い系列における法則性により蓋然性としてしか捉えられない発展性を探ることが課題である。ミルの課題は歴史法則によってもたらされる制度の雛形を求めるのではなく、人間の進歩の段階において、人間性を高めることのできる制度の選択を導き出さうる原理の探究にあったのである。

以上のように、ミルとマルクスの経済思想と歴史観の差異性は基本的には方法論を含む異質な哲学の帰結であることが明らかとなった。その背景にはイギリス経験論とドイツ哲学の伝統の違いがある。それでは両者の違いが異質な哲学に根差すのであるなら、ミルとマルクスの思想と社会改革の対立はこのまま解消されずに終わるのであるだろうか？

5. ミルとマルクスが残した課題

人間の自由の実現はミルとマルクス共通の課題である。しかしマルクスの思想的立場から、功利主義、自由主義、経験主義を思想的特色とするミルの思想に接近することは考えにくい。マルクスのミル批判で明らかなように、マルクスの哲学は矛盾のミル的な総合を折衷主義として排除するからである。他方、ミルは資本主義の永続性を予見する一方で、所有の観念の可変性を意識して社会主義の可能性を探り、その科学的な論証を求めた。ミルの文献からマルクスについての言及はまったく見当たらないのであるが、もしミルがマルクス主義を知っていたと仮定するならば、ミルの社会主義論から判断してミルは次のような疑問を持ったと推定される。

- ①資本と労働は和解不可能な矛盾ではなく、和解できる共通の基盤があるのではないかと？
- ②資本主義の崩壊と共産主義への必然的な移行は可能性としては認めるが疑問である。資本主義は永続するかもしれない、また資本主義から新しい体制へ移行するとすれば、それは決定論的でなく人民が選択することによってなされるであろう。
- ③唯物史観は歴史法則を説明する仮説としていかに有効なのだろうか？作用と反作用が複雑に絡み合う歴史社会の法則性を多面的に捉える科学が望まれるのに。

- ④共産主義における勤労意欲は利己心を基礎とする資本主義の勤労意欲をこえられるのか？ 共産主義において異種労働の配分の問題がうまくいき、実質的な分配的平等が図られるのであろうか？ 共産主義における中央集権、官僚制の弊害はいかに回避されうるのか？
- ⑤社会改革のためには人間性を高める教育が重視されるべきであり、制度改革と教育とは併行してなされないといけない。
- ⑥共産主義において過剰管理がなく人間の自由が完全に保証されるといえるのか？

以上のようなミルの思想からみたマルクス主義に対する疑問は、裏を返せばミル自身の課題でもある。なぜならミルの社会主義論の理想は、改善された資本主義と理想的な共産主義の最善の状態での比較検討と体制の選択であるからだ。ミルは革命を排除するとはいえ、マルクス主義が共産主義の理想の追求に科学的に貢献するなら、それはミルの目指す改革の目的に適う。そして人間性を高める教育と人間の自由の問題はミルの社会主義論のもっとも重要な課題である。しかしながら、ミルとマルクスが活躍した 19 世紀中葉から 150 年を過ぎた現在に目を転じるとき、民主主義における大衆化、大衆に迎合する政治、多数の専制が自由と個性を妨げ、可能な限りの規制緩和を唱える新自由主義が国内外の所得格差を助長する一方で、一部の社会主義国にみられる中央集権と官僚化、人権や自由の抑圧など、資本主義が改善され共産主義が最善の方向に向かっているようには思われない。冷戦体制が終結した 1990 年代以降の世界は、グローバル化が進展し IT をはじめとする科学技術が進化する中で、犯罪は止むことなくテロと戦争は途絶えることがない。これらの現象は、人間性を高める教育の成果が今なお不十分であり、また、よりよき制度の選択がなされているとはいえないことを物語る。ミルとマルクスがもし今の世界をみたら、150 年前と同じことをいうのであろうか？ ベルリンの壁がない今、ミルとマルクスの党派的な対立を離れて、二人の課題の原点に立ち返り問題を見直すことが望まれるのである。

参 考 文 献

- Robbins, L. (1978, 2nd ed.) *The Theory of Economic Policy in English Classical Political Economy*, London: The Macmillan Press, 市川泰治郎訳『古典派経済学の経済政策理論』東洋経済新報社, 1964 年。
- Schumpeter, J. A. (1954) *History of Economic Analysis*, London: George Allen and Unwin, 東畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史』(中), 岩波書店, 2006 年。
- 杉原四郎『ミルとマルクス』増訂版, ミネルヴァ書房, 1967 年。[Sugihara Shiro (1967), *Mill to Marx, Zoteiban*, Minerva Shobo. (in Japanese)]
- 安井俊一『J. S. ミルの社会主義論—体制論の倫理と科学』御茶の水書房, 2014 年。[Yasui Shunichi (2014), *J. S. Mill no Shakaishugiron: Taiseiron no Rinri to Kagaku*, Ochanomizu Shobo. (in Japanese)]

要旨: ミルとマルクスは、ともに人間の自由の実現を目指したが社会改革の構想は際立つ対照を示している。だがミルの思想からみたマルクス主義の欠陥は政治的には利用されたが理論的には注目されなかった。二人が活躍した 19 世紀中葉から 150 年余りを経過した今、その後の歴史的経験をふまえて、ミルとマルクスの社会思想を対比してその課題の原点に立ち返り、問題を見直すことは、混沌として不安定な現代社会の見方を整理し、今後の社会の在り方にヒントを与えてくれるものと思われる。

キーワード: ミルとマルクス，所有と制度，人間の自由と分配的正義，修正資本主義と理想的共産主義